

JACET-Kanto Newsletter

一般社団法人大学英語教育学会関東支部

March 31, 2018 No.10

JACET 関東支部ニューズレター第 10 号 (WEB 版) 刊行に寄せて

支部長 木村 松雄 (青山学院大学)

JACET 関東支部ニューズレター (WEB 版第 10 号) をお届け致します。関東支部ニューズレター委員会委員長の佐野富士子先生 (常葉大学) と副委員長の下山幸成先生 (東洋学園大学) を初めとする委員会委員の先生方の変わらぬご尽力に衷心より御礼を申し上げます。御存知の通り、2013 年度より学術研究発表は、「関東支部紀要」(*JACET-KANTO Journal*) (委員長: 伊東弥香先生 (東海大学)、副委員長: 小田眞幸先生 (玉川大学)) に掲載し、支部活動報告全般については本「ニューズレター (WEB 版)」(年 2 回刊行) に掲載しております。「紀要」と「ニューズレター」は謂わば車の両輪のようにそれぞれの責任を果たしながら相互補完的な関係を保ち関東支部の重要なメディアとして機能しています。今回は

2017 年度の第 2 回目 (通算第 10 回目) のニューズレターとなります。

2017 年度は何と言っても JACET 第 56 回国際大会を関東支部担当により JACET 本部国際大会組織委員会本部 (委員長: 上田倫史先生 (駒澤大学)) と国際大会組織委員会支部 (委員長: 高木亜希子先生 (青山学院大学)) を核とする本部と支部の多くの先生方のご尽力により開催できたことが特に強い印象として残っております。第 56 回国際大会は、「グローバル化が進む世界における英語—世界共通語の教育と研究における現状と課題を探る」を大会テーマとして 8 月 29 日～31 日の 3 日間、青山学院大学青山キャンパスにて、青山学院英語教育研究センター共催、文部科学省、東京都教育委員会、青山学院大学後援により開催

目次

・ 巻頭言 支部長 木村松雄.....	- 1 -	・ <u>支部研究会活動報告 (2017 年度)</u> 各研究会代表.....	- 7 -
・ <u>第 2 回支部総会報告</u> 支部事務局幹事 高木亜希子.....	- 2 -	・ <u>支部大会運営委員会からのお知らせ</u> 支部大会運営委員長 新井巧磨.....	- 12 -
・ <u>月例研究会報告</u> 月例研究会委員長 山本成代 月例研究会副委員長 辻りこ.....	- 3 -	・ <u>支部紀要編集委員会からのお知らせ</u> 支部紀要編集委員長 伊東弥香.....	- 13 -
・ <u>青山学院英語教育研究センター・JACET 関東支部共催講演会報告</u> 支部研究企画会員 飯田敦史 支部研究企画会員 菊池尚代 支部研究企画会員 辻りこ.....	- 4 -	・ <u>事務局だより</u> 支部事務局幹事 高木亜希子.....	- 13 -

され、参加者は歴代 2 位となる 1000 人を数え、発表件数も 238 件となる大変充実した国際大会になりました。大会委員長として私が最も嬉しかったのは、支部の先生方が正しく一丸となって 1 年以上に及ぶ長期の準備を最大限の努力をして行いさらに大会開催の 3 日間可能な限りの施策を講じて大会を成功裏に導いて下さったことです。一体感と大きな手応えを感じました。改めてお世話になりました、JACET 本部(寺内一会長)、JACET 関東支部、青山学院大学、青山学院英語教育研究センター、そしていつも大変お世話になっている賛助会員の皆様と支部を支える先生方に衷心より御礼を申し上げる次第です。

国際大会成功の余韻が冷めやらぬまま越年し早くも春の訪れを感じる今日この頃となりましたが、2020 年開催の東京オリンピック、パラリンピック開催まで 2 年余りとなり、国際社会と連動して、この後外国語とりわけ英語教育の存在と成果がこれまで以上に重視されることは容易に想像できることですが、我々が目を向けるべき先は、2020 年以降のこの国の外国語教育の姿と形ではないでしょうか。JACET 関東支部内での活発な意見交換を御願い申し上げます。

2018 年度 JACET 関東支部大会は、7 月 8 日(日) 神田外語大学にて神田外語大学後援を得て開催されます。何卒奮ってご参加下さいますようお願い致します。2018 年度の JACET 関東支部の活動へのご理解とご協力を何卒宜しく御願い申し上げます。

第 2 回支部総会報告

支部事務局幹事

高木 亜希子 (青山学院大学)

2017 年 11 月 11 日(土)に、青山学院大学 11 号館 1143 教室に於いて、2017 年度第 2 回支部総会が開催されました。支部総会では、2018 年度の事業計画、予算案、支部人事の報告と承認が行

われました。以下に内容を記載いたします(なお、予算案は省略)。

■2018 年度事業計画■

I. 大会、セミナー等の開催 (1 号事業)

(1) 支部大会の開催

名称：平成 30 (2018) 年度関東支部大会

日時：平成 30 (2018) 年 7 月 8 日

場所：神田外語大学

規模：350 名

(2) 支部講演会の開催

名称：青山学院英語教育研究センター・JACET 関東支部共催英語教育講演会

日時：平成 30 (2018) 年 4 月、9 月、11 月、12 月、平成 31 (2019) 年 1 月の 5 回を予定

場所：青山学院大学

内容：

- ・英語教育及び関連する分野にて、現在活躍中の研究者達による、最新の研究成果や知見を発表する講演会を定期的実施する。
- ・英語教育をより実践に結びつけるため、実業界で英語コミュニケーションに携わっている専門家にも、講演を依頼する。

規模：毎回約 50 名

(3) 支部月例研究会の開催

名称：関東支部月例研究会

日時：平成 30 (2018) 年 5 月、6 月、10 月の 3 回を予定

場所：青山学院大学

内容：

- ・英語教育及び関連する分野にて、現在活躍中の研究者達による、最新の研究成果や知見を発表する講演会を定期的実施する。
- ・英語教育をより実践に結びつけるため、実業界で英語コミュニケーションに携わっている専門家にも、講演を依頼する。

規模：毎回約 50 名

II. 『紀要』『支部ニューズレター』等の出版物の刊行（2号事業）

(1) 『JACET 関東支部紀要』第6号（英語名：*JACET-KANTO Journal*）

日時：平成31（2019）年3月31日

規模：約1,100冊

(2) 「JACET 関東支部ニューズレター」第11・12号

日時：平成30（2018）年9月、平成31（2019）年3月の2回を予定

規模：JACET 関東支部 HP に pdf として掲載

III. その他（5号事業）

(1) 支部総会の開催

名称：2018年度第1回、第2回関東支部総会

日時：①平成30（2018）年7月

②平成30（2018）年11月

場所：神田外語大学、青山学院大学

目的：①2017年度の関東支部の事業、会計報告、および2018年度の関東支部の事業計画、予算案および人事案を示す。

②2019年度の関東支部の事業計画、予算案および人事案を示す。

(2) 支部役員会の開催

名称：関東支部運営会議

日時：平成30（2018）年4月、5月、6月、9月、10月、11月、12月、平成31（2019）年1月、3月

場所：青山学院大学

目的：支部の運営における審議、計画の立案

■2018年度支部人事■

(1) 新規副支部長

藤尾美佐

（任期：2018年4月～2019年3月）

(2) 新規研究企画委員

青田庄真、佐藤健

（任期：2018年4月～2019年3月）

月例研究会報告

月例研究委員会委員長

山本成代（創価女子短期大学）

月例研究委員会副委員長

辻 りこ（神田外語大学）

■2017年度下半期活動報告■

2017年度下半期は、11月11日（土）に成蹊大学教授の小林めぐみ先生をお招きして、「映画を通して学ぶ World Englishes」という題目でご講演していただいた。当日は30名近くの参加者があり、映画の各シーンを使い、聴衆を巻き込みながら終始和やかな雰囲気でご講演が進められた。リラックスした雰囲気の中、World Englishes について詳しくご説明され、質疑応答も活発で非常に有意義な時間を持つことができた。講演内容に関しては後述の月例研究会11月報告参照。

■2018年度上半期活動計画■

2018年度上半期は、5月12日（土）に宮原万寿子先生（国際基督教大学）、6月9日（土）に萱忠義先生（学習院女子大学）をお招きしてご発表をお願いする。青山学院大学にて16:00～17:20開催予定。

山本 成代（創価女子短期大学）

■月例研究会11月報告■

日時：2017年11月11日（土）16:00-17:20

場所：青山学院大学11号館4階1143教室

題目：「映画を通して学ぶ World Englishes」

講師：小林めぐみ（成蹊大学）

現在、Crystal（2003）によると英語は世界の人口の約4分の1によって使用されている言語であり、その言語使用者数は英語母語話者よりも英語非母語話者の方が多いと言われている。このような背景から、世界で使われている英語の多様性への理解が深まりつつある。本御講演では初めに、

World Englishes (WE) の定義、そしてその指導の目的、方法や教材について概説頂いた。World Englishes の提唱者である Kachru (1992) によると、WE の指導の目的は、多様な英語の形態に触れ、WE の中立的、寛容的な態度を促進することとしている。また、WE の指導法として、様々な国からのゲストスピーカーの活用、ネットの素材の使用、コーパス、WE に適した教材の使用、そして映画の活用等が提示された。その指導の一つである映画の活用を、インド英語は、『マダム・イン・ニューヨーク (*English Vinglish*) 』(2012)、シンガポール英語は、“I Not Stupid” (2002)、最後に、韓国英語『英語完全征服』”Please Teach Me English” (2002)の各シーンを実際に視聴しながら、丁寧に解説頂いた。

また、WE 指導に映画を用いる場合、映画・英語表現に関して、文献、映画のレビュー、批評、映画データベース等を用いて確認する手段があるが、それだけでは映画がどの位現実社会を反映しているのか、映画に出てくる地域の英語はどの位代表的と言えるのか不明な点も多く、ステレオタイプ的なものになる可能性があるといった課題も示唆された。加えて、個々の英語教師が映画に出てくる各社会の事情や、全ての World Englishes の特徴について十分な知識を持つ事が難しいとの指摘があった。そのような問題点を踏まえ、御講演の後半では、映画に出てくる英語表現や社会事情等に関して現地視聴者にアンケート調査を実施する意義について説明があり、アンケート結果等の活用は、映画を用いた WE の指導の質を高める事が可能であり、さらに現地の事情、バランスの取れた理解に関する資料を公開・共有できれば WE の教材として、映画をより効果的に活用できるということが明示された。本御講演では、学習動機付けを高め、社会文化的理解を促し、生の英語を聞くといった WE 指導の際の映画の使用の意義を私たち自身が短い時間の中で体感することができた。発音等に関する活発な質疑応

答もあり、さらに今後 World Englishes をどのように教室内で提示していくのか私たち自身、再考する機会となった。

(辻 りりこ・神田外語大学)

青山学院英語教育研究センター・JACET

関東支部共催講演会報告

飯田 敦史 (群馬大学)

菊池 尚代 (青山学院大学)

辻 りりこ (神田外語大学)

■青山学院英語教育研究センター・JACET 関東支部共催講演会 (第3回) ■

日時：2017年10月14日(土) 16:00~17:30

場所：青山学院大学 17号館 17401 教室

題目：「英語教員の養成・研修コア・カリキュラムの開発：目標と課題」

講師：馬場哲生先生 (東京学芸大学)

本講演では、昨今の英語教育改革の流れを振り返りながら、英語教員養成・研修のコア・カリキュラム開発とその背景にある考え方、及びその活用上の展望や課題について解説がなされた。

コア・カリキュラム開発背景には、国から英語教育への提言があり、今後予想される国際協調・国際競争の環境において、一人一人が外国語を用いて自分の考えや意見を伝え合える能力を身につけることが重要であるという考え方があった。こうした状況の中で、英語担当教員の英語力・指導力強化が不可欠である一方、小学校5・6年から「科目」として始まる英語教育に備え、小学校の教員養成・研修カリキュラム開発が急務であった。そこで、東京学芸大学では、英語教育関係者・有識者へのアンケート調査を通して日本における英語教育の現状・課題を明確にすると共に、台湾・韓国における英語教育の実態調査結果を踏まえ、小学校教員及び中・高等学校における英語担

当教員の教職課程、現職教員研修のコア・カリキュラム開発・検証に取り組んできた。

小学校及び中・高等学校教員養成・研修コア・カリキュラムの使用に関しては、教員研修の場では拘束力を持つものではないが、教員養成では拘束力を持つものになっている。ただし、今回のコア・カリキュラムは、あくまでも必要最小限の要素を提示するに留まるため、実際の運用に関しては、コア・カリキュラムの中でどの科目をどのように教えるかは各大学に委ねられるものになっている。

また、本講演では、コア・カリキュラムにおける課題・問題点についても議論がなされた。例えば、小学校教員養成コア・カリキュラムにおける授業実践に必要な知識・理解の記述において、子供の言語習得プロセスと指導のあり方が一致していない点、また、小学校教員養成コア・カリキュラムにおける教職に関する単位数が「2単位程度以上」と非常に少ない点などが指摘された。こうした限られた環境においては特に、十分な「授業観察や体験」、「模擬授業」を通しての教員養成が不可欠であり、この考えを踏まえ、講演者が実際に実践している一連の模擬授業の流れが紹介された。大切なことは、単に学生に模擬授業させることではなく、授業者以外の学生にもコメントシートに良かった点・改善点を記入させ、それを授業者に返却することで授業を振り返らせること、また、録画したDVDを見て授業分析・リフレクションをさせ、最終的には改訂版の指導案を作成させることにより、授業改善まで結びつけることである。こうすることで、限られた時間数の中でも個々の学生に十分な学びの機会を提供することが可能となる。

英語教育コア・カリキュラムに関しては、日に日に関心が高くなってきており、講演会参加者からは、中・高等学校教員養成課程における「異文化コミュニケーション」の授業のあり方、「第二言語習得論」を実際にどこに組み込むのか、とい

った運用面の質問から、英語教育コア・カリキュラムと国語教育カリキュラムがどのようにつながっているのか、といった他教科との関連性を問う質問が挙がり、活発な議論が繰り広げられた。

(飯田 敦史・群馬大学)

■青山学院英語教育研究センター・JACET 関東支部共催講演会（第4回）報告■

日時：2017年12月9日（土）16:00-17:30

場所：青山学院大学14号館総研ビル10階第18会議室

題目：「自己表現力育成のための英語ライティング指導：英語俳句を用いての実証研究」

講師：飯田 敦史（群馬大学）

自己表現力育成を目指した英語ライティング指導法を、日本人に馴染みのある英語俳句に求めたユニークな実践、及びその実証研究をご紹介いただいた。昨今のグローバル社会の中では、自分の考えや意見を書くことが今まで以上に求められるようになり、英語ライティング教育の重要性が増している。日本における英語ライティング教育には、自分の伝えたいことが伝えられているかわからない、といった問題点がある。こうした状況の中で、英語教育で早急に取り組むべき課題が「自己表現力」の育成である。俳句は日本人に馴染みがあり、セラピーとしての利用もある、つまり、文化的な利用価値、情意フィルターを下げる効果などが期待できることから、講演者は英語俳句を利用したライティング指導に着目した。これは講演者自らがアメリカ大学院留学中に、英語で書けるとはどういう意味なのか、という根本的な迷いを英語俳句に思いを託した経験にも端を発している。ライティング指導では「ボイス（考え）」、「誰に対して（読み手）」、「コンテクスト（社会の中でどの位置にいるのか）」が要であり、いかに英語俳句がライティング教育に有効であるかが理論上でも認識できた。さらに統計分析、コン

テキスト分析、文体分析、内容分析などを通して得たこれまでの実証研究を踏まえ、英語で俳句を作成することの教育効果は予想以上に高かった。特に、英語で俳句を書くことは初、中級レベルの学習者にとって自己表現力を育成する効果的なアプローチであり、語彙力の増加にも繋がった。

講演の最後にマンマーの生徒が 15 歳で来日してから 18 歳に至るまでの心情の変化を表した 10 作品の英語俳句のご紹介があった。わずか 17 音節、約 13 個の単語数で、個々の経験、歴史・生い立ち、社会的文脈が表現できることに我々は一様に感嘆した。まだ英語学習としての利用が低い英語俳句だが、今後の可能性を垣間見ることができる大変貴重な講演であった。

(菊池 尚代・青山学院大学)

■青山学院英語教育研究センター・JACET 関東支部共催講演会 (第 5 回) ■

日時：2018 年 1 月 20 日 (土) 16:00-17:30

場所：青山学院大学 14 号館 (総研ビル) 9 階第 19 会議室

題目：「コンテキストがもたらす異文化的状況から見る異文化コミュニケーション」

講師：山本 志都 (東海大学)

「異文化」という言葉には、狭義に適用するか、広義に適用するかの違いが存在する (Gudykunst, 2003)。「異文化」の定義によると、狭義で捉えると、国の違いに焦点を当てるのに対し、広義では民族や人種、世代や性差、年齢、宗教等の違いに焦点を当てるといふ。その定義の違いはあるものの、社会的に異なる集団間には、異なる文化的背景が存在するということがまず示された。その上で、集団レベルに焦点のある異文化コミュニケーションでは、カテゴリー化がまず伴うのだが、カテゴリーを使う事で、個々の多様性や、多元性が見えづらくなるという批判が存在することが提示された。しかしながら、カテゴリーを使う事が

ステレオタイプに繋がる可能性があるというのは、どのくらい複雑なカテゴリーを使って認識するかといった認知的複雑性 (未分化・単純・複雑) が低い場合に当てはまるということが指摘された。つまり、人々が、幾つものカテゴリーを参照し、多義的に物事を捉え、文脈に合う選択を行うということが異文化コミュニケーションにおいて大切ということが強調された。

そして、本講演の中盤では、文化の違いをどの程度見いだすのか、違いを感じた時、人々はどのような意味付けをし、評価するのかということを示す、ミルトン・ベネット (1986, 1993, 2011, 2013) の異文化感受性発達モデル (DMIS) の概説がなされた。自分の置かれている集団を中心として、それ以外の違いに関しては、見過ごす、避ける、拒否する傾向を示すといった自文化中心主義から、相手目線で物事を理解し、適切な選択肢を取る事が可能である文化相対主義という言葉を用い、どのように異文化感受性発達がなされるのかというのが説明された。その上で、DMIS とは異なる日本型の構造があるのかを検証した、日本大学生を対象とした研究結果が示された。その結果、異文化間能力・異文化間教育において、自文化中心的段階から、文化相対的段階へ発達するには、各自の境界線を引き直すことで、自分と他者をリフレーミングし、同じ空間を共有し、一体感が生まれるような「場づくり」が大切であるという事【異文化能力としての「曖昧化」】や、違いと向き合い、歩み寄れるような心構え【異文化能力としての「譲歩」】を持つことが、文化相対的段階へとつながるのではないかとということが提示された。「異文化」理解は、どのような段階を経て発達していくのか、研究結果を示しながら詳細に概説頂いた本講演は、途中の参加者同士の意見交換、質疑応答も大いに盛り上がった時間となった。

(辻 りこ・神田外語大学)

支部研究会活動報告（2017年度）

各研究会代表

■教育問題研究会■

代表：清田 洋一

2017年度の研究会活動報告

中心的研究テーマ

- ・『言語教師のポートフォリオ』【小学校英語教師編】の開発
- ・J-POSTL 活用事例の研究
- ・外国語学習における異文化理解教育
- ・小学校英語教育の研究
- ・『言語学習ポートフォリオ』の開発

上記をテーマに、日常的な活動として、研究会活動打ち合わせ会議を年8～10回開催した。このほかに、会の主催の講演会やシンポジウムを行った。特に、研究会の最も大きな研究大会として「言語教育エキスポ 2017：2017年3月5日（日）」を主催した。

研究成果の報告として、紙媒体とオンライン（print edition ISSN: 2188-8256/online edition ISSN: 2188-8264）研究会会誌『Language Teacher Education 言語教師教育』2017 Vol.4 No.2（7月）、Vol.5 No.1（2018年3月）を発行した。内容は、J-POSTL の活用方法に関する論文、実践報告、および、その関連領域に関する論文、研究ノート、実践報告、特別記録、書評などとなっている。

また、『英語科教育の基礎と実践』全面改訂版を発行した（三修社、2017年11月）。

2018年度上半期の研究会活動計画

- ・研究テーマ：2017年度のテーマに継続的に取り組む予定
- ・研究発表予定：J-POSTL を活用した英語教師教育、外国語学習における異文化理解教育、小

学校英語教育の研究（J-POSTL 小学校版）、『言語学習ポートフォリオ』の開発

- ・研究会会誌の発行『Language Teacher Education 言語教師教育』2018年 Vol.5 No.2（7月）、Vol.6 No.1（2019年3月）発行予定
- ・言語教育エキスポ 2018：2018年3月10日（日）予定

■テスト研究会■

代表：中村 優治

1. 研究テーマ

今年度も、昨年度に続き最新の理論を反映しつつ進めてきた「スキル統合型テスト」の作成及び評価方法についての研究を、実践に結びつけることを目指して様々な検証を行った。中心テーマ、及び活動は以下のとおりである。加えて、国際共通語としての英語（EIL, ELF）という視点を取り入れた言語評価についても研究を開始した。

1) 「日本の英語教育のための Assessment literacy の一覧表の精緻化」

これまで行ってきた Assessment Literacy の理論的・実践的検証結果をもとに、問題点を整理しつつ、2017年度も引き続き一覧表の更なる精緻化を目標に実践的研究を積み重ねた。

2) 「スキル統合的テストの開発」

2016年度に引き続き、スキル統合的能力テスト（特にスピーキングおよびライティングテスト）に必要な評価項目、基準（ルーブリック）、テスト方法などの開発・検証を目標として活動を行った。

2. 活動内容

1) 上記目標に沿って下記の言語テスト、アセスメントに関する書籍の読書会を行い、各章について、毎月の例会で担当の委員が発表し、ディスカッションを行った。2冊目の図書は EIL/ELF に

関連するものである。

Read, J. (2015). *Assessing English proficiency for university study*. New York: Palgrave Macmillan.

McKay, S.L. & Brown, J.D. (Eds.) (2016). *Teaching and Assessing EIL in Local Contexts around the World*. Routledge: New York, USA.

2) 評価に関するワークショップを開催し理論と実践の融合を図った。

学部及び大学院で英語科教育法を受講している学生を主たる対象として、9月7日に第10回夏期ワークショップを実施した。現行学習指導要領の目標の一つである「スキル統合的指導と評価」をテーマに掲げ、アセスメントの基本的な理論、構成概念、評価法、項目分析に関する講義、モデル授業、参加者によるテスト作成とその批評活動及び評価結果の分析を行った。

3) 学会発表において研究成果を共有し、分析・議論を深めた。

読書会から得た知見に加えて、国内外のスキル統合型テストの評価方法の分析、毎年開催している上記ワークショップのアンケート分析結果、実際のテスト結果の分析などを基に、スキル統合型テスト作成のための Can-Do チェックリストの精緻化、評価基準の妥当性、学習者が用いるストラテジーなどについて学会発表を行った。実践への適用においては、各教員が日々の授業の中でスキル統合型テストを作成できるように、テスト理論の考え方を反映させたテスト作成モデルを構築し、学会発表や夏期ワークショップを通じて参加者と共有した。発表を行った学会は以下のとおりである。KATE（関東甲信越英語教育学会）年次大会、PAAL 国際大会、JASELE（全国英語教育学会）年次大会、JACET 国際大会及び、JALT 国際大会。

特に JACET 国際大会において行った SIG ポスター・セッションは、90年代からのテスト研究会

の活動の足跡を多くの会員、参加者に知っていただく貴重な機会となった。

3. 今後の活動予定

1) 「日本の英語教育のための Assessment Literacy の一覧表の実践に基づく精緻化」

これまで理論的・実践的検証をもとに作成を進めてきた Assessment Literacy の一覧表 (Can-Do リスト) について、2018 年度はより具体的な実践研究を通じて問題点を整理・解決しつつ、更なる精緻化を目指す。

2) 「スキル統合的テスト方法の開発・検証」

2017 年度に引き続き、スキル統合的能力テスト（特にスピーキングおよびライティングをアウトプットとするもの）の評価項目や基準（ループリック）、様々な目的や状況に応じたテスト方法の開発・検証を行う。特に昨年から開始したストラテジーや言語能力と認知能力との関連性などの学習者要因の研究を反映させて、より総合的で実践的な検証をする。

3) 昨年に引き続き 9 月に夏期ワークショップを開催する予定である。

4) テスト研究会の年次活動報告書と Monograph No.3 を刊行予定である。

■ 談話行動研究会 ■

代表：土屋 慶子

談話行動研究会では、ことばとコミュニケーションの諸相について様々なテーマを取り上げ研究会を開催しています。今年度は下記2つの講演会を催し、3月末には大学院生研究発表会を予定しています。

今年度第1回目の講演会は、4月24日に“‘You speak, I decide’: investigating power dynamics in multi disciplinary team meetings” というタイトルで、スコットランドのアバディーン大学 Tania Fahey Palma 氏にご講演をいただきました

た。医療やビジネスの場での他職種間コミュニケーションをデータにコーパス分析と談話分析を用い、それぞれのコミュニティ特有のコミュニケーション・スタイルや、職場での役割・力関係を起因とするコミュニケーション障壁について調査し、有効なコミュニケーションのための言語実践について分析した大変興味深い内容でした。

第 2 回目は 7 月 1 日に上越教育大学 Ivan Brown 氏を講師にお招きし、”Researching and teaching intercultural communicative competence through conversation-analytic approaches” というタイトルのもと催しました。日本人英語学習者とフィリピン人英語講師との、インターネットを介した英語チュートリアルでの二者間会話のビデオデータをもとに、非言語行為も含む詳細な会話分析を試み、学習者の異文化間コミュニケーション能力の習得について、共通語としての英語 (English as a Lingua Franca) の観点も取り入れ分析した内容で、非常に示唆に富む内容でした。

またこの原稿の提出後となりますが、3 月 24 日に行われます大学院生による研究発表会では、櫻田怜佳氏 (日本女子大学大学院 文学研究科英文学専攻 博士課程後期 2 年) が「英語母語話者と日本語母語話者の TED Talks に見られる構成とことばの使用：スピーチにおける聴衆との関係性の構築に着目して」というタイトルで、大津明子氏 (大東文化大学 外国語学部英語学科 専任講師) が「An analysis of the use and perceptions of English as a lingua franca in Japanese business contexts」というテーマで研究成果をご発表くださる予定です。

■バイリンガリズム研究会■

代表：河野 円

副代表：平井 清子・鈴木 広子

今年度は、「バイリンガリズムの視点から見た EAP 教育開発の基礎研究」をテーマに月 1 回のペースで例会を行った。EAP というの一般的なには、英語で行われる大学・大学院の授業についていくのに必要な英語力を習得するプログラムを指すが、本研究会では、大学 1～2 年生がそれ以降の専門教育において英語の活動に従事できるようになるまでの、いわば「橋渡しプログラム」開発を目指している。そのために主に以下の活動を行った。

1. 理論研究

EAP の基本概念を確認するために Charles and Perocari (2016) および Hyland (2006) を中心に輪読を行った。またバイリンガリズムの新しい概念である Translanguaging について外部講師をお招きして勉強会を実施した。

2. 学会発表

LET 関東支部大会 (2017.6.17) にて『高校英語から大学 EAP 教育への橋渡し教育のあり方—思考を伴う「発問とタスク」にフォーカスして』と題して、発表を行った。高校までの英語と EAP のギャップをバイリンガリズム理論の視点から分析し、医療系学部の授業を一例に挙げて、基礎的な内容の確認から、より深く理解する活動へ、さらに学生が主体的に考えるプロジェクトへと段階的に上がるための発問とタスクを使った実践例の一部を紹介した。

2018 言語教育エキスポ (2018.3.4) では、『思考に焦点をあてた EAP プログラム開発』について、特に EAP のニーズ分析のとらえ方と言語活動の認知レベルを取り入れた調査項目設計について報告を行った。

3. EAP ニーズ分析のためのアンケート設計プロジェクト

Moodle を使用したオンライン・アンケートを作成した。調査項目として 1) 学習者の英語力・

英語使用経験に関するプロフィール、2) 高校で経験した英語科目の学習活動形態、3) 高校での、英語以外の教科—国語、理科、社会における言語学習形態、4) 英語の必要性をカバーする 27 項目を作成した。

来年度は EAP アンケートの本格実施を行い、高大連携や専門科目（他科目）との連携という観点からも研究を進める予定である。詳細は研究会ウェブを照会されたい。

<http://www.jacets-bilingualism.jp/jp/>

■ English as a Lingua Franca (ELF) 研究会 ■

代表：村田 久美子

20 名の設立メンバーでスタートした ELF 研究会は、間もなく 2 周年を迎え、今や 74 名に及ぶ会員は、関東を中心に全国各支部に及んでいる。2017 年度は、ELF が JACET サマーセミナーと国際大会のテーマであったこともあり、会員は各所で活躍した。以下、同年度の研究会活動を箇条書きで紹介する。

1. ジャーナル

ELF 研究会主催イベントをもとに、2018 年 3 月末に Journal of JACET ELF SIG (電子版) Vol. 2 を刊行予定。ELF 議論を日本の大学教育との関連で展開するジャーナルとして、将来的には広く投稿論文も募る予定。

2. 主催イベント

(1) シンポジウム: ELF and native-speakerism (2017.4.29)

ELF とネイティブ主義の関連を多角的に議論。休日にも関わらず 50 名を超える参加者があり盛会。

(2) 日野信行氏特別講演: The historical context of ELF in Japan (2018.3.11)

本原稿執筆時点で未開催だが、日本における ELF 研究を、Global Englishes という幅広い視点で歴史的に考察する講演、及び質疑応答を予定。

3. 関連イベント

(1) Tenth Anniversary Conference of English as a Lingua Franca (2017.6.12-15)

ELF 分野における最大の年次国際大会がヘルシンキ大学で行われ、ELF 研究会員も発表者やパネリストとして多数参加。

(2) 2017 CELF-EL Tama Forum for English Language Teaching (2017.8.22)

玉川大学 ELF センター主催のもと、ELF 研究会員も発表・出席。

(3) JACET 第 44 回サマーセミナー (2017.8.26-27)

今年度は Barbara Seidlhofer 氏と Henry Widdowson 氏 (共にウィーン大学) を迎え、ELF 理論・教育実践の両面に関して、特別講演、及び聴衆との議論が実施された。この特別講演には SIG 代表も登壇。ELF 研究会員も運営に参加し、多数出席。

(4) JACET 第 56 回国際大会 (2017.8.29-31)

ELF 研究会員も 4 つのシンポジウム、個人発表、及び研究会ポスタープレゼンテーションに多数参加。

(5) 第 7 回早稲田 ELF 国際・第 3 回 EMI-ELF ジョイントワークショップ (2017.11.10-11)

ELF 研究会協賛のもと、Tim McNamara 氏 (メルボルン大学)、Joan Turner 氏 (ロンドン大学)、及び Beyza Björkman 氏 (ストックホルム大学) を迎え、ELF の視座から評価、及び教授言語としての英語 (EMI) に焦点を当てて実施。ELF 研究会員も発表者やパネリストとして参加し、多数出席。

(報告者: SIG 広報担当 石川 友和)

■学習者要因研究会■

代表：林 千代

1. 研究テーマ

学習者要因 (Learner Development) 研究会では、第二言語・外国語学習に影響を与える「学習者要因」や「個人差」について、研究を行っている。具体的には、言語適性、認知・学習スタイル、言語学習ストラテジー、モチベーションなどに焦点を当て、文献調査、研究発表、ワークショップなどを実施する。

2. 活動内容 (場所：東洋大学白山キャンパス)

(1) 月例会

5/27 Planning Meeting, 読書会：Psychology of Language Learning, Chapter 6 (Eriko Rikuta & Chiyo Hayashi)

6/24 Presentations: “Using Guests to Encourage Confidence in Japanese College Students Language Ability” (Michel Joel), “Making Better Tests with the Rasch Measurement Model (Omar Karlin)

7/22 Presentations: “On Course with Writing Coursework, of Course!” (Sarah Holland), 読書会：Psychology of Language Learning, Chapter 7 (Kota Ohata & Reiko Yoshihara)

10/14 Presentations: “Generating motivation in low proficiency university students through English lounge visits: one-semester observation of their motivational change in their reflective journals” (Akiko Kiyota), “Effectiveness of Teaching Onset Consonant Clusters for Japanese University Learners of English” (Katsuhiko Watanabe)

1/27 Presentations: “Investigating Teacher

Motivation and Learner Motivation” (Saki Suemori), “A Qualitative Study of Japanese University Students' Engagement with L2 Learning through Group Work” (Ami Yamauchi)

(2)ワークショップの開催

11月25日(土)に、Christine Casanave先生(テンプル大学)をお迎えし、東洋大学白山キャンパスにてワークショップ(テーマ:質的研究)を開催した。

3. 今後の活動予定

2018年度は、さらに活動を充実させ、月例会および様々な学会で研究発表を行う予定である。研究手法に関するワーク・ショップおよび読書会も継続して行う。研究会のプロジェクトとして、共同研究も行う予定である。Learner Development Web ジャーナルを3月末に刊行する。

■授業学研究会■

代表：馬場 千秋

副代表：林 千代

1. 研究テーマ

本研究会は、「大学におけるリメディアル英語授業のあり方」をテーマとしている。少子化、大学全入時代に伴う大学生の学力格差が生じている大学英語教育の現状を踏まえ、学習意欲のない学生や英語を不得意とする学生への対処法とよりよい大学英語授業について探求している。2015年度より、英語リメディアル教科書の分析を開始し、その結果を発表している。

2. 活動内容

・2017年4月22日(土)

於：マイスペース 新宿西口店

英語リメディアル教科書についてのアンケート作成について

・2017年5月27日(土)

於：マイスペース 新宿西口店

(1) 英語リメディアル教科書アンケートについて、学会発表準備

(2) 第56回国際大会研究会ポスターセッションについて

・2017年7月8日(土)

於：マイスペース 新宿西口店

英語リメディアル教科書アンケート分析結果のまとめ、学会発表準備および公開研究会についての審議

・2017年8月5日(土)

於：東洋大学10号館4階 ミーティングルーム

(1) 英語リメディアル教科書アンケート分析結果のまとめ、

(2) 学会発表準備(発表スライドの検討)

(3) 第56回国際大会での研究会ポスターセッション用ポスター作成および最終確認

・2017年8月20日(土)

於：島根大学

全国英語教育学会第43回島根研究大会にて研究発表

・2017年8月1日(木) 2日(金) 3日(土)

於：青山学院大学

(1) 第56回国際大会での研究会ポスターセッション参加

(2) 本部企画の授業学ワークショップ実施(馬場)

・2017年10月21日(土)

於：マイスペース 飯田橋西口店

(1) 全国英語教育学会、第56回国際大会発表報告

(2) JACET 英語教育セミナー準備、第1回公開研究会について

・2017年11月4日(土)

於：関西外国語大学

英語教育セミナーでの発表(林、杉田)

・2017年12月2日(土)

於：帝京科学大学千住キャンパス・セミナー室1および7204教室

第1回公開研究会実施

(1) 講演「英語を不得意とする学習者への効果的な文法指導」

講師：馬場哲生(東京学芸大学教授)

(2) 授業全般および指導についての悩み相談室・意見交換会

3. 今後の活動予定

2018年度は、2017年度に行った英語リメディアル用教科書のニーズ分析結果をもとに、教科書執筆計画を行い、執筆に入っていく予定である。また、第1回ジョイントセミナーでも、よりよい英語授業のあり方について紹介する予定である。公開研究会については、2018年度も年1~2回実施し、講演および意見交換会を行い、より良い授業を行っていくための方策を検討していく予定である。

支部大会運営委員会からのお知らせ

支部大会運営委員長

新井 巧磨(早稲田大学)

今年の関東支部大会は、7月8日(日)に、神田外語大学幕張キャンパスにて開催されます。大会テーマは『Challenges and Possibilities of Active Learning in English Language Education(英語教育におけるアクティブラーニングの課題と可能性)』です。基調講演には、白水始先生(東京大学高大接続研究開発センター)をお迎えし、大会テーマと同じタイトルのもとでお話しして頂きます。

一方、例年とは異なり全体シンポジウムを設けず、その代わりに関東支部企画として大会テーマ

に基づいたワークショップを5件実施致します。五十音順に、大場浩正先生（上越教育大学大学院）「ファシリテーション技術に基づくアクティブラーニング型の英語指導ーホワイトボード・ミーティング（R）を活用してー」、下山幸成先生（東洋学園大学）「英語授業におけるアクティブラーニングの事前準備と実践」、Timothy Murphey 先生（神田外語大学）と Brad Deacon 先生（南山大学）「Promoting Active Learning In and Out of the Classroom」、田邊祐司先生（専修大学）「アクティブラーニングの実際：音声指導を中心に」、伏野久美子先生（東京経済大学）「アクティブラーニングを促進する協同学習活動」の5つです。

他に、開催校企画、研究発表や実践報告、賛助会員である企業の方々による展示に加え、賛助会員発表もごさいます。支部大会で皆様にお会いできることを楽しみにしております。

支部紀要編集委員会からのお知らせ

支部紀要編集委員長
伊東 弥香（東海大学）

支部紀要編集委員会では毎年3月末に紀要を発行しています。現在、2017年度の「関東支部紀要・第5号（JACET-KANTO Journal Vol 5）」完成に向けて、校正作業を行っています。（2018年3月発行予定）。会員の皆様には、4月中に支部大会プログラムと一緒にお届けする予定です。

第5号には論文2本、研究ノート2本を掲載しています。本号発行にあたっては、採択論文を含め、全ての投稿者へ厳しくかつ親身のアドバイスやコメントをお寄せくださった査読者の先生方に多大なご尽力をいただきました。長い審査期間中（8月～12月）に費やしてくださった時間と労力は、質の高い論文を1本でも多く世に送り出したいという査読者の気持ちの表れだと思います。査読者の皆様、また、査読システムに登録してく

ださった先生方に、心よりお礼を申し上げます。当委員会では、2013年度・第1号の創刊以来、常に変革を続けております。第5号ではかねてから懸案であった査読システムのオンライン化を実現いたしました。これはひとえに、当委員会を支えるメンバーの協力と努力の賜物です。今後も、メンバーの意見や工夫を積極的に取り入れながら、本査読システムを活用したピア・レビューによって、投稿者と査読者がお互いに学び合い、高め合う機会を提供できるよう改革を進めてまいります。

2018年度・第6号の投稿締切日は2018年7月20日（金）です。第6号の改革の目玉は、投稿枚数制限を15枚から20枚に増やしたことです。質的研究による論文の投稿が増える現況において、投稿者のニーズに少しでも応えることができれば本望です。支部会員の皆様の積極的な投稿をお待ちしています。

紀要編集委員会メンバー：伊東弥香（委員長）、今井光子、大野秀樹、奥切恵、長田恵理、小田眞幸（副委員長）、熊澤孝昭、鈴木健太郎、多田豪、武田礼子、濱田彰、古家貴雄、Paul McBride（敬称略、50音順）

事務局だより

支部事務局幹事
高木 亜希子（青山学院大学）

■青山学院英語教育研究センター・JACET 関東支部共催講演会及び月例研究会開催のお知らせ■

下記のとおり、共催講演会及び月例研究会を実施いたします。多くの皆さまの参加をお待ちしております。詳細は支部HP、支部会員MLでお知らせいたします。

(1)2018年度第1回青山学院英語教育研究センター・JACET 関東支部共催講演会

日時：2018年4月14日（土）16:00-17:30

場所：青山学院大学 17 号館 3 階 17307 教室
題目：「J-POSTL を活用した英語教員養成」
講師：清田洋一（明星大学）・吉住香織（神田外
語大学）

(2)2018 年度 4 月～9 月の開催予定

2018 年度 JACET 関東支部月例研究会（5 月）

日時：2018 年 5 月 12 日（土）16:00-17:30

2018 年度 JACET 関東支部月例研究会（6 月）

日時：2018 年 6 月 9 日（土）16:00-17:30

2018 年度第 2 回青山学院英語教育研究センター・
JACET 関東支部共催講演会

日時：2018 年 9 月 8 日（土）16:00-17:30

■住所変更届提出のお願い■

支部会員の皆様に、支部大会のご案内や支部紀
要を確実にお届けするために、転居の際には、
JACET 本部事務局へ住所変更届けを提出してく
ださいよう、どうぞよろしく願いいたしま
す。

***JACET-Kanto Newsletter* 第 10 号**

発行日：2018 年 3 月 31 日

発行者：JACET 関東支部（支部長 木村 松雄）

編集者：佐野 富士子、下山 幸成

斎藤 早苗、川口 恵子

発行所：〒150-8366 東京都渋谷区渋谷 4-4-25

青山学院大学文学部英米文学科

木村 松雄 研究室内